

 女性医師の窓

メンター制度が始まって

石川県立中央病院
高橋 麗子

「メンター制度」が創設されました。私は女性医師の多い石川県立中央病院のメンターになりました。これまで、自分の毎日の生活に精一杯であったのに、メンターという大役をお引き受けする立場になったことに、自分自身が驚いています。そして、このことがきっかけとなり、これまでの自分を振り返ってみる機会ができました。

私は、家事や育児を任せられる親が近くにいるという非常に恵まれた環境にありました。それでも、少しでも長く子どもと過ごしたいという思いと、当直くらいしなくては同僚の医師に迷惑をかけるとの考えを天秤にかけながら、毎日を過ごしていたような気がします。形としては常勤を続けることができたのですが、職場では、周りの先生方のご理解があったこと、そして家事や育児に関しては、家族の助けがあったからこそ続けることができたと感謝しています。家庭と仕事にける比重は、その時そのときによって変わっていった気がします。子どもが保育園にでかける直前にきまっておなかが痛いと言い出したとき、保育園の先生からは愛情が足りないかもしれないと言われ、ショックを受けました。やはりふつうの感覚からみると、家庭にける比重が小さかったのかもしれないかもしれません。今は子どもも大きくなり、少し時間に余裕が持てるようになってきました。子どもから「お母さんは料理をしないね」と言われても、笑ってやりすごせる余裕も出てきました。

私が医局に入ったばかりのころは、すごく仕事熱心にもかかわらず、小さい子どもがいるために時間外などの仕事ができなくて肩身の狭い思いをしているようにみえる先輩がいました。しかし、子どもに手がかからなくなってからはバリバリと仕事をされ、とても生き生きとしておられる姿も見てきました。家庭をとるか仕事を取るかの優先順位を決めて上手に仕事をされてきた諸先輩がたは、私にとってはよいお手本であり、「メンター」であります。

女性医師の生き方についての本も何冊か読んでみて、海外では女性医師のキャリアについていろいろな研究がされ、エビデンスとして蓄積されていることに驚きました。そして、自分の中で整理してみて、今思うことは次のようなことです。

ひとつは、出産、育児の忙しい期間も自分の医師としての目標を見失わず、何らかの形で継続すること。完全に止めてしまわなければ、その後の選択肢が増えます。女性が家庭(育児)に時間をかけている間、医師としてのキャリアは他の先生にかなっていません。しかし、子育ての体験を通して得られたものをその後の医師としてのキャリアに生かせれば、きっとすばらしい仕事ができると信じています。

もうひとつは、家庭と仕事の両立は、いろいろな人の協力のもとにあることを意識し、感謝の気持ちを持ち続けること。家事や育児の面でもそうですが、職場では男性医師、独身の女性医師など誰かが仕事の穴をカバーしていることを忘れてはいけないと思います。女性であるためのいろいろなハンディに対して卑屈になる必要はありませんが、女性であることの権利ばかりを振りかざすことなく、感謝の気持ちを持ちながら、女性医師としての生き方をみんなで考えていけたらと思います。